

御大典には難の青年が舞踊隊を組織して舟で出動して、ホーランエーヨーヤサノサツサの掛声も勇ましく、笛太鼓三味線に合せて楫踊をした。当時の歌詞の一節に

清き流孔の番五川 サノ番五川

河口に開けし大江難トサイサイ 大江難

というのがあった。

昭和三年の夏のこと、恋に狂う若おいさんが、内縁の妻と二人の間で出来た子供を親戚の者五人を殺して、朝あらしで番五川を下り、佐伯湾から御里四國に帰ったと噂され、警察の調べもはつきりせず、悲惨な事件の犯人も逮捕できず、海に死体もなく、主なき舟も見えず、恐怖に包まれたながら今迄に未解決のままである。

殺された人々は浜辺で警官立合のもとで死体を解剖し、葬式もすんだ四日後、新仏に燈明をあげ、淋しいのでおかりも消さず寝に就いた夜半、火事となり、まだ若おいさんがあるとの噂が立ち、山狩までしたが手がかりは全くなかつた。
そんな騒動があつたのも、もう遠い過去のものとなつてしまつた。

番五川は潮の干満が甚だしく、満潮のときは潮水が水門を越して水田に入り水稲が枯れ、干潮のときは離の沖に潮を打ち貝を振り、おおさ、おおのり、せみのり等をつみ、獲物が多かつた。

潮時を計算することになれたもので、朝月十五日は六時の満潮、五日、二十日は十時の満潮（凡て旧暦による）、これが基礎となる。例へば昨日は八倍して二十四、その四を更に六倍して二十四となる。即ち昨日は二時二十四分の満潮ということ、これを八六の法という。二十三日の場合昨日を二十を引き、三を八六の法を用いて時刻を算

出して二時二十四分、それに基礎となる二十日十時を計算して十二時二十四分となる。これを私は近所の老人から教つた。

潮時をはかつて晴天無風の日は、隣家の民爺さんが番五川の下流に漁に出かける。こんな日にはきまつて大きな疋らめ、赤えい、さざえ、づかに、とあたりなど獲物が多かつた。この川には鮎、はぜ、鰻が多く、鰻の養殖も芳島の清水由夫さんと離の佐藤京太郎さんが経営していた。

直想

早春 遠近を歩く

會員 羽 柴

弘

もう春である。はるかに仰ぎ見る椿山は、うす茶にのみすみ、おちこちの杉林は及ま霜にやけて赤茶けている。土堤道をゆけば、南向の斜面をつくし日もうたけてみすけらしく、よく見れば鏡跡には僅かに今年の草イ草かのぞいている。

歩くの一年中で一番よい時である。

一月三十日 日曜日 前夜の雨は忘れたようだが、た。かねて念願の元越山に登ろうというおぼけである。浦代峠の旧トンネル口で待ち合せたら約二十名になつた。御案内は地元浦代の会員高宮氏。私たちは国木田独歩が一回目に登つたコースを選んだ。しばらくは道ろい道もない樹林や藪を歩いたが、やがて根根づたいの防火線に出て、登つたり降つたり僅かに造林に連う小路を踏

みわけ方から、正味一時間半を歩いたろうか。登るにつれて視界は次第にひろげ、立ちどまつては見るがや山並みとながめ、佐伯市や佐伯湾も、眼の前ひろがる鶴見半島や羊津湾を指顧する。

正午を五分ほど過ぎたころ、元越の頂上に達した。まことにすばらしい景観である。独歩の文章は真似得ない。私は、次のような詩に托して見た。

あこがれて年も久しき、
元越の山を指して、
その昔、独歩らが登りしという、
十二段の尻根を左どりて、
今日その頂きに登りて立てり。

見はるかす東北の海、紺青の佐伯湾。
東のがた、大島の島々越えて、
豊後水道はかす及て遠く、
すく眼の下は呼べば答えむ、
米津の碧き浦々猶庭のごとし。

いづかえり見れば南より西に、
重畳の山並は波濤のごとく重なりつづき
祖母、傾は雲につづけり。
樹梢のかなを左北の空には
なつかしき椿山也、さいは尺間嶺

考岳もならびて立てり。
嗚呼、こゝ元越の頂きに立てば、
誰大なる海山のながめ、
今この嶺の枯草の上に、
立ちつくし、眼及びりて、
見ればもあかぬ天地のひろがり。

南面する枯草に坐れば、
立春にはおと数日なるに、
冬の陽気や未くぬきしく、
こゝ頂きて日射しをゆぐふ、
しはらく風を渡るがごとし、

春をけなわの心地するかな。
(帰りて即夜まよる)

降りて木立の中野河内に入つた。この道はまた遠かつた。羊蹄の生いかぶさった道が長々とつづいた。途中展望のきくところで一と休みしたとき、木立出身の森下会員から村の話を伺つて、いちご栽培などで活気と示している農村、ビニールハウスの広大に並んでいる様々を見て、なるほどと思つた。

二月五日 二月の史跡めぐり、宇山から津志河内へ。
私は風邪をひいて同行出来なかつた。残念。

二月十一日 建國記念日 私は御里宇津々に病人見舞に帰つた。去年の九月であつたか、聖嶽の洞穴に背ご入つたが、その石灰岩の岩壁の彼方には、二三日前の雲が光つていた。
ふる里や 尻根に残雪のとこみどころ

二月十九日 大坂の長谷川段長より古い大坂の地図が唐く。大坂城のすゝ道く、大坂の役に兵利高波が守備したという備前高京橋口、大長寺、佐伯藩の大坂蔵屋敷など、たどりつゝ、しばらくは歴史散歩をつづける。地図を広げて見ることは楽しいことである。

次の日二月二十日は、佐伯歩こう会に知られて蒲代から、竹野浦、小浦と歩き、峠を越して鶴見新寺越に出た。このコースははじめてであつたので敬えて参加したわけ

である。古松会員も元氣よく加つていられる。

浦代では先ず大願寺。山門の揚額「慈雲山」には「蘇高標」とある。まさしく寛龍公の筆蹟である。

すく隣へといつて右手一段高くの養福寺は古い。本堂の彫物は見事である。前祭の庫裡の裏手に、亭々とそびえる大銀香ば大きい。おいはく今日日は悪天と忘れていたので、抱きついて見たら三抱え半以上あった。樹令何百年であらうか。

打ち違れて竹野浦へ、そして小浦へ。海添いの道路で珍らしいや一群の佐伯四國のお通路さん達に出会う。「ようおまわりなされる」とねがうれば「お元氣はどうぞ」と答えが来る。

粟島神社に参拜、ちよつと休んで部落へ集から峠越しかゝる。鶴見半島の脊骨に当るわけ、昔日人通りが多くなれもされていたようだが、今日では華一人越す人もなく、すだばそが道と癒えている。

尾根を越えると、パツと視界が開け、眼の下は小貝嶺が見える。双眼鏡で見ると岩礁のあちこちにへびついで、磯釣りをしてる釣マニアの姿が見える。黄や青のアンラック姿が、しきりと釣竿を振っている。

長根道を更に進むと中越側から伸びてくる猪垣がつづいている。石垣と高さ二米を超す目と築きあげ、猪や鹿を侵入を防ごうというもの。いおゆる一万里の長城である。岡本四波歩の小説「鹿狩」の舞台となつた所である。羽状にも丹敷にも振寄にもあるが、耕して天に届く段々畑は甘藷や表を守らうとする農民の切実な努力である。この民俗的な江戸時代から明治、大正とつづいた建造物、今日や、年月の長物の如くであるが、農民の悲憤まわまりない構築物、長い年月をかけての営みを無駄に思つてはならない。鶴見所文化殿である。

猪垣を越えて中越へ入道も、前を考らすあるかつた。やつと中越の部落と眼の下に見える丘に達して昼食、沖の海は蒸れてい左かここは日なまり、楽しくゆつくりと食

事を左のしんだ。

これで今日の歩こう会は日程を終了、午後一時二十分カバスで皆は帰途についたが、私一人後に残り昨冬訪れた西生庵にのぼつて見る。ところが庵は全面的な改築が進められていたのに驚いた。

私は羽出浦への旧道を歩いて奥部先と訪ね、お茶をいれたき話と交わし、元氣をとり戻して更に帆波浦から日野浦へと歩いた。日野浦は切支丹清太夫の里であるが、どこにもその名残りとはとどめる何物もなかつた。バス停に枝を張つておこらうの赤い実が印象に残っている。

私はバスに乗って帰途についたのであつた。

二月二十二日、といえは私は不思議と「母弾三勇士」を毎年思い出す。いわゆる戦前派というべきか。

午後、堅田の城八幡社で某テレビ社の、堅田神楽の撮影があるというので、これ幸いと観に行くと。加藤氏はハミミ撮影機とテープレコーダーと持参、私は写真機を手に。津波ついでに社殿の背後の八幡山に登る。中世の山城、塔の跡らしい切り落としや掘り切りがあちこちにあるが、今日昼なお暗い光景うっそうたる密林、この社叢は高く評価したい。

城八幡の社におしびの咲きこぼれ

更にその二十五日、私は蒲江所教案に招かれ、畑野浦の集会に出席した。公民館には二十名あまりの方々が集まり、富沢氏によって適切なりードがなされていった。次々と古文書や資料や記録が提示され、積極的な発言が交わされ、ところ々文化殿を見つけたし、これを尊重しようとの意欲が盛り上がる。私はその熱氣につつまれる。

午後一時、みんなは墓地に集まり、富沢氏に導かれて

見てまわる。驚いたことに慶長の年号の入った墓石があり、元禄期以前のものが数基ある。それと立派な御影石や砂岩の石門である。

福泉寺の山門下には魚鱗塔があり、本堂前には昨年秋の魚鱗供養の塔婆が高く建てられている。魚鱗に対する感謝供養のことが、昔も今もかわりなく守られていることに私は感動を覚えた。

清水庵にもまわった。参道の落椿、天空より落ちる龍のしぶき、そしてかぎり老朽の安ん庵の庄産庫裡、境内近くに乱雑に散乱する古塔（明後十二日には大奉じて整備する由）、畑野浦の御土史、御土文化に対する追求の場はここであると思つた。

時刻は下つたが楠本浦まで車とはせ、庵に上つた。一本の樟が彫り上げたという三十三体の仏像（西国三十三番の弁尊仏）が、硝子戸の中はズラリと並んでいる。まことに壯観である。福泉寺で先年見たこの楠本で掘り出したという樟の巨木の根、この三十三体の樟の一本が彫った仏像、そして楠本という地名。これこそ所討すべき御土史である。

暮れなすむ寺背に繖の花ありて

三月に入つて、五日の日曜は同志六人で湯岳に登つたが、その詳細は略する。七日の夕方私は一人で宇山城址に登り、まっ直ぐに佐土原に通する道をさぐつた。それは明後日、市民歩こう会が堅田の史跡をめぐると案内役と引受けての予備調査である。今日（十日）は市の文化財パトロールで、黒沢、谷川、市福所、府坂、石打と車でまわつた。移動には車かよいが現地ではやはり歩くに限る。幸い春はまだ浅いので野でも山でも歩くに一番よい時である。

宇藤水から天向谷を自製車で巡らうとが、保瀬、水た場照に登らうとが話が多い。三月下旬から四月にかけて史談会の行事として実施したいものである。三輪ほどまんざくの花咲きにけり。（おわり）

書籍

宮崎県北川村瀬口 徳藤清助氏より
瀬口御頭様の例祭の使ひ （三月三日付）

春とは名の及毎日寒う御座います。益々御清健の御事とおよろこび申します。毎度佐伯史談会御志願頂き有難く御礼申します。

初て御頭様もその後日々参詣者相續き、古老人クラブとして有難いことと存じております。つきましては昨年一応決めました例祭の七月廿五日が盛夏の折とて、老人クラブ主催としては何かと困難な点もあり、村長中井さんの御意見なども頂き、歳前三河内長高知さんの例祭旧正月十五日に變更し、去る二月廿九日（旧正月十五日）盛大に行いました。何卒御了承御願い申します。

当日は北川村長、休石さん、部長会長、民生委員、駐在史書を招き、吉祥寺住職の饗應で盛大に終始しました。およろこび下さい。休石さん、徳普堂直川村休石翁、日お侍申しました。御都合でお出でいただけませんでした。何卒史談会開催の節は右の旨御伝えいたたくと共に、御参詣下さいますよう、お待ち申します。

書き落しました。読者の後、赤白の餅を保育園児童に一振にまき、一層のにぎわいでした。（後略）

（附記）この瀬口のお頭様は、日尾高知の峯に懐妊した、佐伯惟忠の頭を産んだと云ふ、今もかわりなく祭られていることまことに奇事なことに感じ入ります。（編者）